
とあるIS使い

野鳥獣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるIS使い

【Nコード】

N9622Y

【作者名】

野鳥獣

【あらすじ】

学園都市の中で第7位に位置する発火能力者が授業の一環で学園外の施設警備をするため展示会場の視察に来ていたが、搬入されてきたISに触れてしまい提供していたIS学園の教師人の前で機動させてしまった。

学園都市から離れ、IS学園に転入することになってしまった少年の物語。

とあるIS

学園都市では、能力5の発火能力者の力を持つ少年は、学園外で行われる展示会に警備員として行ったが搬送されているISに触れてしまいあるう事が起動させてしまう。ISを扱う二人目の男として学園都市から専用機を託されIS学園に舞い降りる。

その少年の名前は、シロイセキト白井紅兔

年齢：16歳

容姿：茶髪の赤目 イメージ（輝きのタクトに出てくるシンドウ・スガタ）

専用機：あかつき暁

パーソナルカラー：真紅で縁が白いが単一仕様で某ガンダムぽい姿になる。

プロローグ（前書き）

携帯止められたので、PCで執筆開始。
元紋章学です。

プロローグ

ここは、学園都市 東京都西部を切り拓いて作られたこの都市では、“超能力開発”が学校のカリキュラムに組み込まれており230万の人口の実に八割を占める学生達が日々『頭の開発』に取り組んでいるのだが・・・

「お兄様―何処ですのー！！」

中学生でこの学園都市内の風紀委員に勤務する俺の妹 白井黒子が“お兄様”と呼んでいる少年の物語なのだが・・・少年は、すでに家を出ており妹の声がむなしく響くだけだった。

第177支部隊

「紅兎君黒子ちゃん待たなくて良かったの？」

この支部に部長をする女性に呼ばれ書類から頭を上げ話出した少年がこの物語の主人公”白井紅兎”茶髪の赤目

「良いも何も、明日から学園外で行われる展示会の資料製作を夜明けとともに開始すると昨日連絡したにもかかわらず忘れている黒が悪い。」

紅兎が言う様に連絡したのにいつもと同じ0700に起きて俺が住んでいる寮に行き探しまわったという黒妹が悪いのだ。しかも俺に対する過剰までのブラコン・・・

「お兄様―黒子は、黒子は、お兄様の温もりが！」

いつもの台詞と共に後ろに瞬間移動をしてまで、背中に抱きついてくる。

「黒、仕事中だ離れなさい。」

「嫌ですわ!」

「はあー、この書類が出来上がり次第、現地に行って警備配置の確認が有るんだよ」

兄と妹のやり取りは、恒例行事なので周りわ微笑ましく見ている。出来れば止めて欲しい。そこによりやく救いが現れた。

「黒子、紅兎さんの仕事また邪魔してるの?」

ここの支部と関係ないが、この学園として超能力者第3位に位置する超電磁砲こと”御坂美琴”である。美琴が来るとこの妹は、ターゲットを変更して彼女にダイブ!!

バチバチ!

と黒子が電撃をつけ崩れ落ちる。

「助かったぞ美琴。流石第3位だな。」

痺れている黒子を見捨てて俺のほうに来て・・・

「何言ってるんですか、第7位の発火能力有るじゃないですか?」

そう白井紅兎は、発火能力で第七位に位置する超能力者だ。

「美琴・・・流石に実の妹を焼きたくは、ないぞ。それに支部が消し炭になる。」

紅兎の意味を体で経験済みの人たちは、顔面蒼白になる。一度紅兎をほんきで怒らし支部にあるすべての金属を融解させ消し炭になりかかった事を思い出したようだった。

「よし、書類製作終了つと」

タン！

最後のEnterを打ち終え上着を羽織ると

「じゃ、学園外の展示施設に行ってきます。美琴、黒に襲われない様にな（笑）」

支部を出ると同時に黒子が復活したらしく美琴の悲鳴が聞こえた。

プロローグ（後書き）

とあるキャラは、プロローグのみの参加となります。他わたぶん夏休みか冬休みあたりかな？基本軸は、ISに置きたいと思っています。

ブローグES機動（前書き）

かなり短いです。

ブローグIS機動

書類を終え、会場施設にいき指示を出す中一人の女性が近付いてきたその女性は、黒髪に凜とした黒いスーツが似合うひとだった。

「君が学園都市から来た者か？」

「はい、学園都市第177支部より派遣されて来ました白井紅兎です。」

「そか、若いのに良い指揮をしているから気になってな。」

「いえまだまだです。人の死角を潰すだけでも苦労しています。」

死角を潰すのに苦労していると聞いた女性は、興味を持ったのか聞いてきた。

「ほーたといえば？」

「例えば、このホール入り口ですが一見見晴らしが良いですが、会場に押し寄せるお客を想定すると、入り口手前の両角かとISを展示するこの・・・」

ISを展示してある場所のそばで、触れるというジェスチャーをしようとしてISに触れてしまいそれは、起こった・・・

「搭乗者確認・・・皮膜装甲展開・・・推進機正常作動・・・近接ブレイ

ト展開」

男である俺がISを起動させてしまった。もちろん近くにいた女性が驚愕していたのは、言うまでもない。

「まさか一夏だけでなく他にもISを動かせる奴が居るとわな．．．」

女性がどこかに電話した後向き直り……

「よく聞け、白井紅兎・明日より学園都市からIS学園に転入とする。」

「え……ええええええええ！」

「それから私は、IS学園で教師をしている。織斑千冬だ。学校では、織斑先生と呼ぶように！」

ゆうむを言わず紅兎は、IS学園に行くことになった。会場から学園都市に帰るとすで通知書が支部に回され学園にも回っていた。諦め、寮に戻ると既に荷物が全てIS学園に送られておりものけの空になっていた。

「会場からたった一時間でこれかよ……黒絶対煩いだろうな……気が重くなる。」

案の定黒子わ既に知っており、『これからお兄様の温もりが』と黒いオーラが噴出していた。

すまん美琴犠牲になってくれ。IS学園に向かうことになった。

ブローグES機動（後書き）

本当にみじかくて済みません。次回から本編に入りたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9622y/>

とあるIS使い

2011年11月29日21時52分発行